

昭和の東南海地震体験談

氏名： 笹山 勝三(ささやま・かつぞう)

生年月日： 昭和11年11月6日

地震を体験した場所： 新宮市三輪崎

当時の家族状況： 祖母、母、姉、兄(学徒動員のため不在)



1) 地震発生時の状況

南海地震よりもむしろ、東南海地震の記憶が強く残っていた。

当時8歳だった少年は、自宅から400Mほど離れた郵便局(三輪崎)の前、路上で友人(同級生)3人と自転車遊びをしていた。

突然、歩けない程の揺れを感じ、立つ事さえ出来ず、思わず地面に座り込んでしまった。

2) 津波襲来時の状況

一体何が起きたのか理解出来ず、友人と話しながら家に帰る。自宅に戻る途中、近所の小母さんに声を掛けられた「お前の家は海岸端だから戻ったら危険だ」と言われ小母さんに連れられお宮(三輪崎八幡神社)に避難した。昔から三輪崎地区の人達は、地震が起きたら必然的にお宮に避難する様教訓が備わっていた。(右写真 避難した三輪崎八幡神社、裏山)



お宮から(約400~500m先)海岸方向に目を向けると、鈴島の左側付近で津波が渦を巻き、漁船が左右に流されていた。津波は、三輪崎海岸から佐野湾(現在の新宮港)まで押し寄せては引くように繰り返し流れ、勢力を弱めたため、内陸までは侵入しなかった。お宮から見たので津波の高さがどれ位だったかは予測できなかった。(左写真 避難場所から見下ろす三輪崎海岸)

3) 家族の行動・被害

家族も特に避難した様子もなく、祖母、母、姉とも皆無事であった。

4) 集落・周囲の被害

三輪崎地区では造船場が流されたが、死亡した人や、崩落、損壊した家屋は確認されていない。津波がさった後の浜は非常にきれいで、漁船だけが打ち上げられてあった。

5) 地震・津波後の生活

家屋に特に倒壊や損傷がなかったため、以前と変わらず平穏に生活することが出来た。

6) 次の災害への備え

その後、同市佐野に転居したが、次の地震が襲来した際は、家に留まるよりも、近隣に空き地が多く、海拔6m程の所なので波の侵入はないと考え、ここに避難したほうが難を逃れられると考えている。

7) その他

左写真は昭和初期の三輪崎海岸、右写真は現在の三輪崎海岸。

